

特色ある学校

「次の一手」を生み出す人材の育成に向けて

—全教職員による AL 校内研修 3 年間の取組—

1. はじめに

本校がある「ものづくりの街」大田区には、約 3,500 の工場が集積する。しかし、区の推計によると、工場の数はピーク時の 1983 年から比べると 6 割も減っている。そのような中、本校デュアルシステム科提携企業の会長が語った言葉が大変示唆に富んでいる。「大田区の町工場は、与えられた設計図面から徹底して正確につくるのがうまい。しかし、今はそれ以上の付加価値を求められる時代。多くの町工場が苦しみながら次の一手を模索している」。

本校は、日本のものづくり産業の発展のために従来の工業高校教育のカリキュラムに、アクティブ・ラーニング（以下 AL）の手法を活用した指導内容や指導方法を加えることで、「付加価値」や「次の一手」を生み出すことのできる生徒を育成したいと考えている。

平成 27 年 4 月、私が校長として着任した当時の生徒の状況は、実習を伴わない座学の授業で生徒の学習意欲が低いという問題があり、早朝の授業から机に突っ伏す生徒が多く、全教職員に問題点を指摘して授業改善に向け AL を全教職員で取り組むことを示し、1 年かけて AL が必要とされる理由と、AL の知識・技能を身に付けるための校内研修を実施した。その結果、本校 AL 校内研修活動が都教育委員会から認められ、AL 研究開始 2 年目にアクティブ・ラー

東京都立六郷工科高等学校統括校長 佐々木 哲

ニング推進校の指定を受けた。

【1 年目のテーマと成果】

テーマ：「AL の理論や実践を学ぶ」

成果：本校教員のアンケート（平成 27 年 10 月 19 日実施）において「AL の授業を理解している」の項目に対し、77%の教員から「当てはまる」「やや当てはまる」という肯定的な回答を得た。AL 型授業実施率は 30%であった。

2 年目以降は都教育委員会 AL 推進校指定を受けたことを契機に、平成 28 年度からの 3 年間の指定期間で取り組む段階的な目標を設定し、AL 実施率向上に向けて取り組んだ。以下に 2 年目以降の研修テーマと研修成果を示す。

【2 年目（AL 推進校 1 年目）のテーマと成果】

テーマ：「生徒が寝ない座学の授業の研究と推進」

成果：AL 型授業実施率が 30%から 80%に向上
学習意欲向上を示す調査結果が出た。

【3 年目（AL 推進校 2 年目）のテーマと成果】

テーマ：「基礎基本を定着させる『生徒が寝ない授業』の研究と推進」

「アクティブ・ラーナー教員を育成するための研究と推進」

成果：「次の一手を生み出せる生徒の育成」という人材育成目標の共有化。（全教員）
前年度を上回る学習意欲の向上。

【今年（AL 推進校 3 年目）のテーマと成果】

テーマ：「AL の手法を活用した工業高校における人材育成のための指導方法や指導内

容の開発」

成果予測：次の一手を生み出せる能力を育む為の指導内容と指導方法の好事例の発表。課題研究における研究内容の質的向上

2. これまでの主な校内研修と学校視察の内容

3年間の主な校内研修と学校視察等は(1)～(27)に示した通りである。校内研修は悉皆研修として実施し20名程の教員が他校視察に参加。



写真1 校内研修風景

- (1) 授業における指導方法やALに関する現状調査①（本校教員対象）
- (2) 東京都高等学校AL型授業研究会への参加
- (3) 学校視察 東京都立〇〇高等学校「キャリア教育とAL」
- (4) 「学び合い」に関するAL校内研修
- (5) ALに関する現状調査②（本校教員対象）
- (6) 都立〇〇高等学校 実践報告会 参加
- (7) 学校視察 大田区教育委員会教育研究推進校 〇〇中学校 公開授業視察
- (8) 学校等視察 〇〇教育センターと鳥取県立〇〇工業高等学校
- (9) 校内研修（悉皆研修）ALの知識・理解についての校内研修
講師：産業能率大学 教授 小林昭文 氏
- (10) ALに関する現状調査③（本校教員対象）
- (11) 学校視察 神奈川県立〇〇高等学校
- (12) 学校視察 私立〇〇高等学校
- (13) 校外研修 平成27年度東京都教育研究員

高等学校国語部会 研究発表会 参加

- (14) 授業視察 東京都立〇〇高等学校
 - (15) 校内研修会「ジグソー法（知識構成型ジグソー法・KCJ法）の体験講習」
講師：静岡大学大学院教育学研究科附属 学習科学研究教育センター特任助教 遠山紗矢香 氏
 - (16) 学校視察 〇〇工業大学 AL実践事例研究会への参加
 - (17) 学校視察 東京都立〇〇高等学校
 - (18) 学校視察 大田区立〇〇小学校
 - (19) 学校視察 大田区立〇〇中学校
 - (20) 校内研修「意欲を引き出し、成長を促す効果的なコミュニケーションの技術と学び合う体感ワークショップ」
講師：産業能率大学 鈴木建生 氏
 - (21) 学校視察 私立〇〇工業高等学校
 - (22) 学校視察 私立〇〇高等学校
 - (23) ALに関する校内推進の目的と実践方法を全教員に周知するための校内研修
 - (24) 「コーチング」の手法を用いたAL型授業について全教職員が学ぶ校内研修会
 - (25) AL校内推進の成果と課題を明らかにする校内研修会
-
- 写真2 研究紀要第1号
- (26) 「企業が求めている人材」をテーマとしたAL校内研修会
講師：金沢星稜大学進路支援センター長 堀口英則 氏
 - (27) 「各教科単位で教員各自が次年度の授業改

善に関する取組目標を設定する」ことをテーマとした校内研修会
講師：都教育委員会指導主事 6 名

3. 学校経営計画の立案

校内研修や AL についての現状調査①②③、自己申告最終申告時の面接で得られた教員の提案等を基に次年度の学校経営計画に授業改善の方向性を示す。

4. 教員各自の取組目標の設定

学校経営計画に基づき全ての教員が自己申告書の学習指導欄に AL を取り入れた授業改善の取組について記入する。

5. 学校経営計画に基づく授業改善の実施

- (1) 全職員による AL の手法を活用した授業の実施を学校経営計画に位置付けて実施計画を立案させる。(年間 2 回程度)
- (2) 自己申告当初申告面接で AL 実施計画を全教員から聞き取る。
- (3) 6 月授業公開日は、保護者と一般都民対象に実施(座学を AL で行う授業公開)
参観者は「本日の授業の見どころ」を見ながら興味のある授業を自由に参観する。

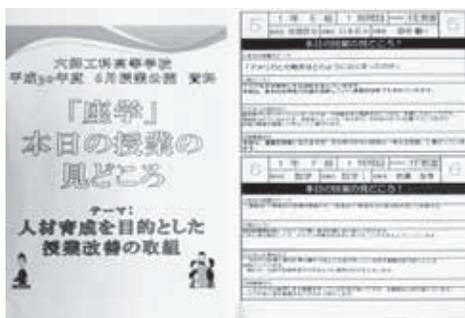


写真3 授業の見どころ (授業公開)

- (4) 自己申告中間面接と最終面接時に全教員が AL 型授業の実施状況を管理職に指定様式で報告する。
- (5) 全教員から提出された報告様式を合本して

研究紀要にまとめ全教員に配布する。

6. 新たな年度の第 1 回校内研修の実施

前年度の研究紀要を基に AL 型授業改善への課題と改善方策を確認する校内研修。



写真4 社会科 AL 授業研究

7. これまでの 3 年間の成果と課題

成果として、平成 27 年 10 月に本校教員に実施したアンケートで「AL の授業を理解している」等、肯定的な回答をした教員は 77%であった。平成 29 年 5 月に実施したアンケートでは 95%となった。また、平成 27 年 10 月に本校教員に実施したアンケートで「AL の授業を実施している」と回答した教員は 30%であった。

平成 30 年 2 月の自己申告最終申告時の面接調査では 95%に上昇した。具体的現象として、座学の授業で寝る生徒が大きく減少し、教え合う学習活動等に積極的な生徒の増加が見られたことである。成果の背景には校内研修等により、(1)教員の AL 型授業の知識と技能の向上、(2)AL 型授業実施教員の増加。この 2 点が影響したものと考えている。全教員による AL 校内研修が評価され、平成 29 年度都教育委員会職員表彰(団体)を受賞した。

校内研修後のアンケート集計では、「本研修は自分の抱えていた課題等の解決に結びつくと思う」と「本研修は自分にとって新たな課題を見つけることができる研修であった」の各項目に変化がないことが問題点である。ともに「当

てはまらない」と回答した教員が15%、「当てはまる」と回答した教員が50%程度いる。AL自体が目的化している授業改善という意識から、生徒が自ら考え気付きを得ることで深い学びに誘う授業改善という意識に変えていくことが喫緊の課題と捉えている。

8. 将来を見据えた授業改革

平成28年度からは東京都教育委員会の「AL推進校」の指定を受け、学校の玄関や外のフェンスには「AL推進校」と掲示。取組をまとめた「六工AL通信」を月に1回程度、次に示す3点をねらいとして発行している。(1)教職員、生徒、保護者がALに取り組んでいることを意識する、(2)授業改善に向けての保護者の理解と協力を得る、(3)地域企業や中学生への本校教育活動の宣伝効果を得る。

更にこの年度から組織的な取組として各教科に1名AL推進委員を置いて教科内での授業研究を行っている。特に新規採用から6年目位までの若手教員が精力的に授業研究を進めている。これに触発されてベテランの教員も参加して授業を見せ合うなど教職員間の研修活動が活発になっている。例えば数学の授業では、生徒同士が教え合ったり、どのように解いたかを発表したりする形式を導入している。この教員は、生徒が自分で考え、判断、表現できる能力を、授業を通して身につけさせることを意識して授業に臨んでいる。授業のはじめに本時の目標に加え伸ばして欲しい能力2点、(1)人に伝える力、(2)コミュニケーション能力を明確に伝え、それが出来たか否かを、授業終了時に生徒自身が評価するというスタイルである。

また、社会科の授業では、生徒が自分で考える時間、話し合う時間などをタイマーで区切って設定し、教員は適宜生徒と会話しながら机間指導を行う。活発な意見交換の後、授業のまとめとして生徒は各自の振り返りシートに気付い

たことなどを書き込み授業を終える。この教員は、社会科を通して、しっかりした職業人になること、様々な現象を生徒がより深く考えることを意識して授業に臨んでいる。

専門学科の授業では、実習には積極的に取り組むが、座学になると寝てしまう生徒が多いことが課題であった。ALの取組は、生徒が寝ない座学の研究でもあった。講義型の授業に比べALの場合、生徒の4割が眠くならなかったとアンケートで回答している。また、ALに取り組んだ8割の教員が、授業中の生徒の様子について、生徒は楽しく積極的に取り組んでいる、授業にメリハリがついた、自身の問題として捉え深く考えるようになった、などの変容がみられたとアンケートで回答している。

冒頭でも述べたが、本校がALに取り組む背景には、ものづくりの街、大田区にある工業高校という存在意義がある。本校の生徒がグローバル展開を目指す製品開発型のものづくり企業で活躍できる能力、言い換えれば無から1を創り出す能力を育成する為の授業改善、教育課程に変えていかなければならないという考え方に基づいている。

2年前に全面改訂した本校の教育目標はその実現を目指して設定したものであり、「あいさつを大事にして職業人としての立ち居振る舞いが出来る人材の育成」、「就職試験に合格できる学力の定着」が全教職員の理解と協働で着実に前進している。全教員が教育目標の実現に向け人材育成型ALのオリジナリティーを創意・工夫しながら追求しているのが本校の現状である。

子どもたちの10年先を見据えたとき、今の授業をどのように変えていくのか。その根っこにある教育課程と教育方法について、地域の様々な資源を活用、全ての教員が参加し、より良くデザインするカリキュラム・マネジメントの実現。今年度はこの核心に迫っていきたい。